

健康文化

## 心

今井田 二三子

終戦後、どれくらい経過していたでしょうか、小雪のちらつく師走の大垣駅の前で、傍らに募金の箱を置いて深々と頭を下げられる外国の紳士を見かけました。募金のいれものは箱のことも鍋のこともあったように思います。毎年、暮れに大垣の友人の家を訪れることはないので、今年もまた、と思ったのはその人は毎年師走には募金にその場所に立っておられたのでしょうか。当時は街で外国の人を見掛けることは稀で、そーっと近づいては何がしかを箱に入れたこともありました。

それから十数年を経て、大垣の友人が英会話を習い始めたと言われた折、英会話の先生のお父様がその紳士であったことを知りました。その人はアメリカの宣教師さんで、その時には既に大垣の近くに“あゆみの家”という精神的に障害を持つ子供達のケアと教育の施設をたちあげ、愛と慈しみをもって子供達を見守り、生活の指導、訓練を行っておられると聞かされました。その友達も感動と感激で心の中が満ち溢れているのか会う度ごとにボーマンさん、あゆみの家の話は、彼女の英語の先生の話と共に必ず出ておりました。

その後Tさんのボーマンさんについての手記を目にする機会があり、氏は戦後、駐留軍のMP（アメリカ陸軍の憲兵）の一人として来日され、お腹をすかした多くの戦災孤児の姿を目にして、自身の給料の中から子供達の衣類と食料品を与え続けられたそうです。子供達はボーマンさんを慕いアメリカに帰還される時「また必ず日本に戻ってきて」と、つぶらな瞳で懇願したと言われます。その子供達の願いに答えて、何年かの後、今度は宣教師として奥様と共に来日され、何回めかの赴任の地が大垣になり、そこに永住されることになりました。そして一番困っている人々に手を差しのべられた結果があゆみの家の設立につながったようです。

ボーマンさんの温かい心と熱意に感動し協力された地元の人々もあったと聞きました。言葉も思うままにならない異国で、当時は自国の人ですら手がける

ことが困難であった施設の設立、愛の力の偉大さ、その行動力に感嘆、感動しました。

私がボーマンさんにお会いしたのは更に何年かを経過していました。不思議な巡り合わせで、ある年の暮れ、近くに住む親戚の家族が外国の人の結婚式に出席するというのです、何気なく話を聞き流しているうち、あゆみの家の話が出てくるではありませんか「もしかしてその人ボーマンさんの娘さん?」「そうです」、そして結婚後の住まいが親戚の家の近くで私の所からも近く、私の友人の友人兼英会話の先生と常々聞いていたので結婚後、手作りのランチに招待することにしました。

それがきっかけで私の英会話のレッスンは始まりました。まもなく娘さんのご家族は大垣の近くに転居され、その新しい家に招待された折、初めてボーマンさんにお会いすることになります。

出会いとはいえない大垣駅の募金から実に三十数年が経っていました。

その慈愛に満ちた優しい瞳、温かい大きな手、かつての孤児達がすがった手、孤児達に心の温かさを伝え、生きる力を与えた手と握手しながら愛に国境はなく、心は地球上何処でも、誰にでも通わすことができることをしみじみ思いました。

「my father died」

ある朝、電話を受けて、体調が最近すぐれられないと聞いていましたが一瞬言葉を失いました。その偉大な足跡を思い起こす度ごとに、私は今まで何もしてこなかったことを自ら恥じます。

もう遅すぎる、いやまだ遅くはない。今、私は自問自答しています。

(内科開業医)